

2011年11月22日
全国保険医団体連合会
会長 住江 憲勇

被爆者 13,000 人の黒い雨データの速やかな解析を求める要請書

放射線影響研究所（放影研）は11月21日の記者会見で、「対照群を含む寿命調査（LSS）対象者120,321人の基本調査データ MSQ（Master Sample Questionnaire）の中に、黒い雨に遭ったと答えている人が約13,000人いることがわかった」と公表した。

これまで公表しなかった理由を問われ、放影研大久保利晃理事長は、「あまり役に立たないだろうという認識でいた」「調査目的で集められたデータではない」と述べている。これは到底、国民の納得できる回答とは言えない。役に立たないどころか、低線量被曝、内部被曝の人体影響を知るうえで、極めて有用かつ貴重なデータである。

MSQ の設問は、Was person caught in Fallout Rain?（放射性沈下物を含む雨に遭遇しましたか）と明確に雨の中の放射性物質の存在を意識したものであり、あわせて、発熱、全身倦怠、嘔吐、食欲不振、下痢、血便、点状出血、脱毛等、放射線の急性症状を詳細に聞き取っている。

遭遇した場所の情報は重要なもので、長崎県保険医協会が放影研より入手した資料より作成した地図は、長崎の黒い雨の雨域を塗りかえるものであった（別紙）。

これに加えて、初期の遮蔽調査には降り始めの時間、持続、雨の性状、色、帽子の有無等、さらに詳細なデータが含まれている。

「当初入力されていなかった MSQ のデータを 2003 年頃から少しずつコンピュータにインプットし始めた」との説明であったが、何故 2003 年まで入力しなかったのか、入力に果たして 7 年間もかかるものなのか。とても説明責任を果たしたとは言い難い。

13,000 件の黒い雨データは放影研のものでも、国のものでもない。黒い雨に遭った被爆者のものである。

放影研は「科学的な解析ができるか検討する」としている。そのような悠長なことは言っていられない。

当会は貴職に対し、一刻も早く黒い雨データの解析を行い、結果を公表することを要請するものである。

以上